

---

# 或る姫君に捧ぐ詩

霧島 燐子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

或る姫君に捧ぐ詩

### 【NZコード】

N3848C

### 【作者名】

霧島 燐子

### 【あらすじ】

幼い頃に遊んでもらった少年・コウタを一途に思う姫君は成長するにつれて国民を愛し・国民に愛される姫君へと成長した。しかし或る夜、国が何者かの襲撃を受けて崩壊する。ガラス職人に引き止められて目立たぬ路地裏にいたため姫君と職人は難を免れたが、二人を除く他の国民・王族すべてが死んでいた。「もう独りになるのは嫌だ」と、姫君は職人の旅に同行することを決める。これは姫君と職人の旅の物語。

## プロローグ

とある国の王妃は、ある日女の子を産みました。先の男の子が幼くして亡くなつたため、王様はとても喜びました。女の子はユウロと名付けられ、王様と王妃様にかわいがられすくすくと育ちました。

姫が五歳の誕生日、姫の世話係は姫を連れて外の森へ遊びに行きました。姫は生まれてこの方屋敷より外へ出たことが無かつたため、初めての外に呆れるほどはしゃぎます。

しかし気づけば時すでに遅し。姫は、森の深部へ迷い込んでしまつていたのです。世話係を兄として慕つっていた姫は、世話係を呼び続けます。

「にいさま……にいさまあつ」

最初は気付かなかつた姫ですが、誰もいないことに気付いて泣き始めます。そして進むたびに、さらに深部へと迷い込んでしまうのです。

森の奥で胡弓を弾いていた少年は、少女の泣き声にふと手を止めた。泣き声はしだいにこちらへ近付いて来る。この森に足を踏み入れる人は滅多におらず、一週間この森を探索しても人の影一つ見当たらなかつた。それが、今になつて幼子の泣き声が響く。

気になつた少年は、胡弓をケースに片付けてそれを担ぎ、声のするほうへ向かつた。森の御神木とされているらしい菩提樹という木の下で、少女が膝を抱えて泣いている。

「……どうかしたんですか？」

声をかけてみる。少女は涙で濡れた顔を上げ、少年の顔を見た。何も言わない少女の横に座り、少年は胡弓を取り出す。心地よい音色が森に響く。少年の口からぽつりぽつりと呴かれるコトバの数々。

ゆつたり空氣に漫透して、その音は響く。いつの間にか泣きやんでいた少女は、もつと聽かせてというように少年の腕をつかんだ。

「ほんにちは。どうかしたんですか？」

「コウねつ、まこ」になっちゃったの

「迷子？ それは大変ですね……どこから来たんですか？」

「あつち！ あつちの、おつきなおうち！」

「おつきなおうち……って、一国の姫君なんですか」

「コウタは森の外にある古く大きな洋館を思い出しながら、言つ。この国で一番大きく、一番頑丈そうな造りだったという記憶がある。そして城下町とその屋敷との間には大きな川があり、そこをわたる方法は昼間だけ架けられている橋しかなかつたはずだ。屋敷と森との間には巨大な堀以外の隔たりはなかつたので、もしかすると堀のどこかにある穴から抜け出てきてしまったのかも知れない。

息について、少年は少女の頭を撫でた。

「じゃあ僕が連れて行つて差し上げますから、帰りましょ?」

「やつ。おじちゃん、なんて言つの?」

「おじ……ま、いいか。僕はコウタ。詩人です」

「シジン? コウタ、シジンつてなに?」

「詩を詠う人。詩詠みの詩人だよ」

「つこり笑みを浮かべて、詩人・コウタはそう口にする。姫はコウタと同じようににつこりと満面の笑みを浮かべて、立ち上がる。そうして、興味深そうにコウタの持つている胡弓を見た。

「なあに、それ？ きれーねっ」

「ああ、これですか？ 胡弓といつ樂器です。聽きたいですか？」

問えば、首が千切れるのではないかというほど勢いで姫は首を何度も縦に振る。コウタは一度息をついてから、弓を持ち、皮面を右にして胡弓を左腿の付け根に乗せる。左手の指で弦を押さえて音階をとりながら、右手に持つた弓で弦をこすると、先ほどのような音色が響く。ぽつぽつと紡がれるコトバ。

「コウタを背凭れに、姫は心地よさそうに首を左右に揺らす。

気付けば森は肌寒くなり、日暮れを告げていた。胡弓を弾くコウタの横で姫はいつの間にやら眠りについてしまったらしい、すやすやと規則的な寝息を繰り返している。

「コウタは姫を起こさないように胡弓をケースに片付け、胡弓を持ち姫を抱いて歩き出す。森を抜けてすぐのところに男が一人いた。ものすごくあわてた様子で森から出てきたコウタのほうへやって来る。

「すまないが、この森の中に……姫様！　ああよかつた、あなたが見つけてくれたんですか？」

問い合わせようとして、コウタの腕の中にいる姫を見て男は心底安心したようにコウタのほうへ近寄ってきた。コウタは男に姫を渡しきるりと踵を返した。

男はもうコウタのほうを気にしていなじようで、姫を抱きかかえて泣いている。

（あの男は旅に向かないな……疑わない人間は旅で早死にする。あの姫君も、旅には向かないだろう）

森の深部、小屋の中。一人胡弓を弾きながら、コウタは自問自答を繰り返した。長い時間引き続けた後で、くつと口元を歪めた。

数日後、城の中。姫は目が覚めて、部屋を出る。部屋の外には今また扉をノックしようとしている兄の姿があった。

「こゝさまっ」

「おはよづじやこます、姫様。稽古の時間ですので、お迎えにあがりました」

「え……じゃああとでいく」

それだけ言つて姫は扉を閉めて、服を着替える。王家の仕来りで、王家に生れた者はその性別に関係なく五歳から武術を嗜むことになつてゐる。姫は弓術を嗜んでいるのだが、如何せん姫は武術を気に

入つておらず、稽古をよく逃げ出す。

稽古着ではなく普段着を着て、姫は部屋を出る。きょりきょりと辺りを見回しながら、城を出た。先日世話係に教えてもらひた隠し扉から城の外へ出て、森へ向かつ。

森の奥へ進むにつれ、音は大きくなる。以前森に迷つたときに聞いた音と同じ音色だ。コウロは大きく息を吸つて、コウタの名前を叫んだ。するとピタリと音がやむ。しばらくしてコウタの姿が遠くに見えた。

「コータッ」

「姫君、どうかしたんですか？　また迷子なら、外までお連れしますよ」

「ヒメじゃないよつ。コウロは、コウロー、おひが、でてきたの。けい」「きらこなんだあ」

「稽古？　今どきの姫君は武術でも躋むんですかねえ。まあいいでしう、今日はなにをしますか？」

「えつとねえ~」

その日から、コウロは数日に一度だけ稽古を逃げ出して森へきた。コウタの横でただひたすらゆつたりとした音色を聴く。それがコウロの唯一といつていい楽しい時間だった。

しかし、夢は唐突に終わりを告げるも。ある夜、窓を叩く音にユウロは田を覚ました。コウロの部屋は大きく、ベッドからベランダまでの距離だけでもコウロの短い足ではかなりの距離となる。

カーテンを開くと、そこには片膝をついて頭を下げるコウタがいた。

「コータ、どうしたの？」

「今日は姫君にお別れを言いに来たのですよ」

そう言つて、コウタは切なそうに笑んだ。コウロの瞳に、一瞬で涙が溜まる。

「な、なんでつ。だつてコータ、コウと一緒にいつも遊んでくれ

たのに……っ」「

「ええ。でも僕は、そろそろ行かなくちゃならないんです。もつと姫君と遊んでいたいところですが、ね」

そう言って、「ウタは胡弓」のケースから小さな玩具を取り出した。それは「ウタが持っている胡弓」をとても小さくしたようなレプリカ以下の楽器だ。音が鳴るかどうかすら、定かではない。

「これを、姫君に差し上げます。綺麗な音は出ませんが、よろしければお使いください」

では、と言つて立ち上がり、「ウタは塙から塙を伝い、屋根から屋根へ飛び移りながらユウロの目の前から消えた。

翌朝、ユウロは世話係にベランダを開いてもらい、玩具を拾う。それをユウロは、枕元に置いて眠つた。思い出すのは、胡弓を弾きながら恥ずかしそうに歌を詠む詩人の姿。

もう、十年以上前の話だ。

屋敷は炎の海に沈み、姫は一人の男と立ち尽くした。父や母を亡くしたことよりも、多くの国民が犠牲になつたことが姫にとつては悲しかつた。

私があなたに出会わなければよかつたの？　と、姫は何度も男に言つた。男は黙つて姫の話を聞いていた。

二人の出会いは、一ヶ月ほど前に遡る。

派手ではない服を着た女が、橋を渡つて城下町へやつてくる。町の住民も最初のうちは驚いていたものの、それが毎日一年も続けば慣れたもので、子供たちなどは彼女にとてもよく懐いていた。

彼女は、國民に愛される姫君だ。

「おはようございます、コウロ姫様」

「おはようございます。今日もいい天氣ですね」

いろいろな店に顔を出しながら、コウロは町を歩いていく。すれ違う度に、子供たちはコウロの服裾を引っ張る。これも、コウロには心地よかつた。

その日、コウロは猫を見つけた。

「あら、猫だわ。珍しいわね、黒猫なんて。最近ではネコを見ることが珍しいのに。あ、ちょっと待ちなさいっ」

コウロは物陰に逃げ込んだ猫を追つて、路地裏へ入つていく。

この国に猫はほとんど存在しない。数年前に、猫は汚らしい獣として徹底的に駆除された。時に不吉の象徴とされる黒猫は、真っ先に処分された。

暖かい日の光さえ届かない、ひつそりとした裏道。力チャン、力チャンと音のするほうへ目を向けると、そこからちいさな少年が一つの箱を持って出てきた。

「ありがと、おじちゃんっ」

そう言って、少年は足早に去って行ってしまう。ユウロは興味半分で、その中を覗き込んだ。中は通りよりも一層薄暗く、汚れたオレンジ色の光一つだけで照らされていた。奥に扉がある。

失礼します、と一応断つてからユウロはその取っ手に手をかけた

……そのとき。

「…」

腕を掴まれた。そこには一人の若い男。男は冷たい瞳でユウロを一瞥し、奥の扉へ消えた。追つてユウロも中に入る。

部屋の中には、うつすらと入ってくる太陽の光を受けてまぶしくない程度に輝いている多種多様のガラス製品が並べられていた。ユウロはそれを見て、男のほうへ目を向ける。男は大きな暖炉のよくなもの前で、延々と水飴のようなものをいじっている。

「ねえ、あなたの名前は？」

「…」

「答えてくれてもいいじゃない」

だが、男は答えることはおろかユウロのほうを向こうともしなかつた。ユウロは扉を勢いよく閉めて、その店を出て行った。

「あ、姫様！」

「姫様、来てたの？」

町のメインストリートへ戻ると、子供たちが集まって来る。ユウロは笑いながら、彼らの相手をした。

ユウロは数年前に兄を亡くした。否、正確には兄ではなく世話係なのだが。両親にも懐かなかつたユウロが唯一懐いた相手。それが、

その世話係だった。彼はいつもユウロの傍でユウロを縛り付けない程度に世話をしてくれていた。彼は、国王からの指令で隣町まで荷を運んでいる際に、通りがかりの盗賊に襲われたのだという。盗賊は彼を殺し、荷を奪つて闘争。国王は彼が死んだと言つことよりも荷が奪われたことを嘆き、彼のことをことごとく罵った。以来、ユウロは国王・王妃である両親とはほとんど口をきかなくなり、姫としての業務以外は屋敷の外へ出るよつになってしまった。

「……」  
夜、窓の外を眺めながら思い出すのは世話係と詩人のことばかりだ。両親と楽しく会話した思い出など皆無に等しい。生みの親である王妃でさえ、ユウロが立ち歩くようになるや否や放任主義となつて乳母に任せるようになり、ユウロが小学生に上がるころには世話係が肉親のような存在となつていた。

（胡弓の音だ……どこから聴こえてくるのかな……）

懐かしい胡弓の音に耳を傾けながら、ユウロは眠りに着いた。

翌朝、ユウロは目が覚めてすぐに現在の世話係を呼んだ。無口で無愛想、その上冷徹でユウロに対する扱いが酷い。ことあるごとにユウロの行動にケチをつけてくるのだ。ユウロは彼を苦手と思つて……否、嫌つている。

「なんでしょうか、ユウロ姫様」

「……今日の仕事を、さつさと言つて下がつてちょうどいい」

「今日はありません。ユウロ姫様は、遊びのためならばどんなお仕事も数時間で終わらせになられますから」  
(相変わらず嫌味ね)  
「他に何か御用があありますか」

「ないわ、下がりなさい」

世話係は軽く頭を下げて去つて行つた。

ユウロは窓の外を見て、空を見上げた。雲一つない快晴。ユウロ

はラフなスタイルに着替えて、街へ出向いた。

「あら姫様、朝早くからいらっしゃるなんて、珍しいですねえ」

「おはようございます、姫様」

店先で品物の準備をしている夫婦に出会い、ユウロはニッコリ笑つて頭を下げる。

長話を避けて、ユウロはガラス工房へ向かった。中はやはり薄暗く、今日はオレンジ色の光さえ消えていた。

（いないのかしら）

ユウロは疑問に思いながら、中へ足を踏み入れる。入り口からは死角になっている場所に、男はいた。

「……こんにちは。また、来たの」

ユウロが呟くと、男は一度ユウロのほうを横目で見て、再び正面に視線を戻した。壁の一点を見つめて、そこから視線を動かさない。

ユウロは何時間もそこにいた。何も言わずに、何時間もその工房に居座っていた。そして口が沈んでから、さよならを言つて立ち去る。

それからさらに数日が経つたある日。その日もユウロはガラス工房へ来ていた。ユウロは男に『職人』という愛称をつけて、愚痴をこぼすようになっていた。相変わらず職人は壁を見つめたりガラス製品を作つたりと、ユウロの相手はしてくれない。

「私ね、好きな人がいるの」

その日、職人は例の大きな暖炉のようなものの前で延々と水飴のようなものをいじつっていた。ユウロの言葉に一度手を止めたが、意に介さぬ様子で作業を続行する。そんな職人の様子を氣にも留めず、ユウロは話しが続けた。

「いらないのに、お父様は婚約の話ばかり持つてくるし、各国からの求婚者も後を絶たないし。私……本当に、その人以外とは結婚する気もお付き合いする気もないのに」

「……」

職人は何も言わず、ただ黙つてユウロの愚痴を聞いていた。パチツと音をたてて薪が崩れる。

ふとユウロが外をみると、すでに日は沈んでいた。

「あ、もう帰らなきや。じゃーね、職人」

ユウロがそう言って手を振ると、職人はガラスを磨く手を止めて、手を振り返す。特に表情を変えるわけでもなく、ヒラヒラと手を振つて再びガラスを磨き始めた。

ユウロは再びさよならを言って、工房を出て行つた。

ユウロが家へ帰ると、珍しいことに両親が出迎えてくれた。その後ろには、ユウロの世話係とメイドが一人いる。この二人がそろつてユウロを出迎えるときは、碌なことがない。じうじうときは、大体会話の内容が決まつていた。

「おかえりなさい、ユウロ」

「……何か用かしら」

「ええ、あなたの次のお見合いの」

「うるさいわね、私は自分で決めた人じゃないと結婚しないって言つてるでしょっ」

「でも、今回の相手は同盟に参加してる国の跡継ぎなのよ」

「……馬鹿じゃないの、そんなの私には関係ないわ」

それだけ言つて、ユウロは部屋へ上がつた。窓の外からは、胡弓の音が遠く響いている。

「コーダ……どこにいるの、会いたいよ……っ」

口を開けば涙がこぼれる。十年以上前の記憶を思い出すだけで目頭が熱くなる。脳の奥がじんわりと麻痺するように痺れる。

あの夜を境にユウロの前から姿を消した胡弓弾きのコウタは、以降一度とユウロの前に姿を現さず、ユウロの耳に胡弓弾きの噂が届くこともない。

数日後、ユウロは部屋を出た。この数日、扉を出すぐのところに番人が一人もいたため、外へ出ることが叶わなかつた。ベランダの下にも見張りをつけられては脱出不可能というわけだ。

今日は例の見合いの日である。ベランダを開くと下に見張りはおらず、ユウロは小さくガッシュポーズをとつた。

そうしてベランダから脱出して、屋敷の外へ抜け出す。一度屋敷を振り返つたが、変化は見られない。

「……」

ユウロは橋を渡つて、街へ出る。商店街を通過して工房へ急いだ。薄暗い裏道を走つて、工房の扉を開く。

オレンジの光さえ灯つていらない室内は、目を凝らさなければ足元さえ見えない状況だつた。

「職人、いないの？」

声を振り絞るが、声は返つて来ない。ユウロは床にへたり込み、職人がいつも座つて壁を見ている椅子にうつぶせて眠りについた。

その日、職人は國の外へ出ていた。ある商人にガラス製品を買い取つてもらつっていたのである。

國へ戻り工房へ向かう中途、職人はいろいろな人から声をかけられた。おそらく姫君・ユウロが最近職人のところに入り浸つているから、職人も怖い人ではないのだと思われたのだろう。

「あ、ガラス屋さん、お久しぶりです」

商店街で食材を買つていて、店の老婦人に声をかけられる。老婦人はにこにこと笑いながら老眼鏡をかけ直した。職人は無表情な瞳を老婦人に向け、軽く首を下げて裏道に入つて行つた。

店へ戻り電気をつけると、そこにはユウロがいるではないか。

「……」

「コーダ……」

「……おい

低い、低い声にユウロは目を覚ました。目を擦りながらその姿を確認する。

「しょく、にん……」

初めて聞く職人の声。低音ながらも耳に馴染みやすい、優しい声だ。ユウロは職人の顔を凝視したまま、硬直してしまった。

職人は眉間にしわを寄せて瞳を閉じ、一度息をついた。買つてきた食材の中から果物を一つ取り出してユウロの手に乗せ、作業場のほうへ入つていってしまう。慌ててユウロも後を追つた。

勢いよく燃える炎は踊るように揺れる。その炎を見つめながら、ユウロは再びうた寝を始めた。

自分自身が吹っ飛ばされるかのような奇妙な感覚に、ユウロは目を見ました。寝ぼけ眼を擦りながら室内を確認する。炎は消えていて、職人の姿もなかつた。

「職人……？」

扉のところへ行くと、身をかがめた職人の姿。職人はユウロの方へ向いて、人差し指を唇にあてた。

(黙つてろつてことかな……でもどうして)

思考を最後まで続ける間もなく、爆音が聞こえる。作業場の天窓からは、星が見受けられた。もうどうやら夜らしい。

「ねえ職人……どうしたの？　ねえ、何が起こつてるの？」

ユウロが不安そうにそう尋ねると、黙つてろ、とでもいうようにユウロを後ろで抱きしめるよつた形で、ユウロの口を両手で塞いでしまう。

「んーーー！」

「黙れつて言つてるんだよ」

低く呟いた声に、ユウロは体を縮こまらせておとなしくする。外では相変わらずの爆音と、銃声。そして……悲鳴が聞こえる。

恐怖の中、ユウロは職人に抱かれたまま眠りについた。

鳥の鳴き声も聽こえない、朝。作業場の天窓から差し込むまぶしいまでの陽光で、ユウロは目を覚ました。スースーと頭上で聞こえる寝息に上を向くと、そこには職人の顔がある。

「し、職人つ！」

「ん……ああ」

「ね、ねえ、私……私、どうしたの？ 昨日のあれは、なに？」

「……見ればわかるよ、行つてみるか」

「う、うん」

躊躇いがちにユウロが頷くと、職人はユウロを立たせ。そうして二人で外へ出て、屋敷のほうへ向かう。ところが……商店街へ出向いた瞬間、ユウロは地面へとへたり込んでしまう。

「そんな、嘘……」

「……」

紅く、血に染まつた商店街。殺された人々。職人にしがみついて、泣き出すユウロ。

商店街の賑やかだつた道は、大量の死体と血のにおいに満ちていた。見たことある老人や老婆の姿。ユウロの服裾を引いて走り去つていた子どもたち。全てが血塗れになつて横たわつていた。

「なんで、どうして……っ」

職人はへたり込んでしまつたユウロを横抱きにして、ゆっくりと裏道へ戻つて行く。気を失つたユウロを床に寝かせて、ガタガタと準備を始めた。

\* \* \*

日の光が額に当たる。その暖かさ故か、ユウロはゆっくりと瞳を開いた。傍らには職人が寝ていた痕跡があるが、すでにそこにはいなかつた。

「……職人、どこ……？」

周りを見渡せば、そこは氣の覆い茂っている森。故郷の森のようだ。あの、コウタと出会った深い深い森のような緑。

ユウロは立ち上がり高くなつた視界で周りをもう一度見回す。遠くで胡弓の響く音。それに導かれるまま、ユウロは夢遊病者のようにのろのろとその方向へ歩き出す。

音の主は、大きな太い木の根に腰掛けて、ゆつたりと胡弓を弾いていた。

「……しょく、にん……」

「？　ああ、起きたのか。気分はどうだ？」

「平氣……あの、私、どうして……」

「……他国軍の襲撃によつて国はほぼ壊滅。屋敷は全壊していて、およそ人の気配を感じられなかつた。街で生きている人間も見えない。ここは、国から一番近い森だ。といつても、数キロのきよりではあるが」

「……国が……滅びた、の？」

「そういうことになる。俺の母国まで旅に同行してもらひう。心配しなくとも大した距離じやない。そこで保護してもらえばいい」

そう言って、職人には胡弓をケースに片付け始める。ユウロは慌ててその手を止めた。

「ち、ちよつと待つてよ。私を一人にしないで。私、もう独りは嫌なのよ。職人も旅をするんでしょう？　なら、その旅に私も同行させて」

「……断る」

そう言つてユウロの手を跳ね除け、職人は胡弓をケースに片付け終える。ケースを木の根元に置いたまま、職人は軽く飛び上がつて

一番低い木の枝に腰掛けた。

ユウロは少しも動かず、ただ地面の一点を睨み付けている。その

こぶしが強く握り締められているのを見て、職人は一度息をつく。

「俺は結局のところ、追われる身なんだ。あの国は隠れやすかつた。これからまた隠れるところを探さなきゃならない。俺といると、危険に巻き込まれる危険性がある。一国の姫君でしかないあんたが旅に同行しても、すぐに死ぬのがオチだ。やめとけ」

「それでもいいの。独りで寂しい思いをするより、危険に身をさらして死ぬほうがよっぽどましよ」

「……我僕だな、あんた。ここまで我僕だとは知らなかつた」

口元に笑みを浮かべて、職人は言う。少し声音が変わったことに驚きユウロが木の枝へ顔を向けると、職人が枝から飛び降りた。そうしてユウロの目の前へ着地する。

並んだことがほんとなかつたためわからなかつたが、職人はユウロよりも二十センチ以上身長が高い。見上げた格好のまま、ユウロは口を開いた。

「私諦め悪いの。私も一緒に旅をしてもいいでしょう？　もう、嫌とは言わせないわよ。私、もう本当に独りは嫌なの。一度と……独りにはなりたくないの」

「……一緒に旅をするなら一つだけ言つておくが、あまり俺に話しかけるな。火の粉をかぶりたければ、な」

不敵な笑みを浮かべて、職人はユウロの頭を撫でてやる。

『姫君は本当に甘えん坊ですねえ』

懐かしいコウタの声が聞こえる。ユウロはそのぬくもりに身を委ね、再び眠りに着いた。職人のほうへ凭れ掛かって、ゆっくりと夢におちる。

ひそしぶりにコウロは、「ウタの夢を見た。夢の中、懐かしい笑顔で笑っている」コウタはコウロよりも背が低い。

（「一タ……なんで、私を置いてどこかにいっちゃったの……？」）  
明るかつた景色が暗くなつて、「ウタが笑いながら遠ざかる。必死で追いかけるけれど、それにはちつとも追いつかない。

「コ、タ……」

寝言を漏らすコウロの頭を、ゆっくりと職人は撫でる。閉じた瞳から、ゆっくりと涙が流れる。片手でぬぐつてやるが、それでもまた流れる。

「……そんなにアイツが好きかよ、馬鹿野郎」  
手のひらを握る。すると寝ぼけた声を出しながらコウロが目を覚ました。

「んん……」

「ああ、起きたか」

「ごめつ、寝ちゃつた……」

「かまわねえよ。さ、そろそろ動くか……」

「……ねえ職人、あの、いまさら何だけど……私、旅とかしたこと

なくて、全然役に立てないと思うんだけど……」

「アホか。そんなん分かりきってるんだよ。じゃあアレか、お前は役に立たないから一人でいいのか。まあ俺はそれでもいいけどな」

「嫌！ 絶対にそれだけはッ」

「じゃあ決まりだな」

「ひとつ笑つて、職人は言つ。」

二人は森を出て、延々と続く砂漠地帯へと足を踏み入れた。

照り付ける太陽。潤されることのないのどの渴き。少女は砂漠の上、一人旅をしていた。

「ちょっとお……どこにいるの、あの人ーっ」

ユウロと職人は、なおも砂漠の上を歩いていた。もともと砂漠の砂国で育ったユウロである、これくらいの暑さは大して堪えてないようだ。

一方職人は、長年の日陰生活が祟つてか、すでに意識が朦朧としてきた様子。

「職人、大丈夫？」

「暑いのは平気だ」

そう言って、額に浮かぶ汗をぬぐう。遠くにオアシスが見えたことを伝えると、職人はユウロに対してもうかと頷き、黙々と歩き続けた。平気と言つてはいるが、あまり顔色はよくなかった。

歩き続けること、もう何時間にならうか。そろそろ日が暮れようかという太陽の傾きの頃、職人はピタリと足を止めた。

「職人？」

「来る」

「へ？」

ユウロが間抜けな声を出した瞬間、職人がバツタンと前のめりに

倒れた。何事かとユウロは目を見張る。職人の上に、濃紺色のショートヘアをした少女が乗つかつてている。

「シリ亞、探したよーっ」

「クロルか……お前は俺の邪魔しかしないんだな、本当に」「今日は兄貴も一緒にから許してよ」

そう言つて少女は後ろを振り返る。しかしそこには人はおらず。おかしいなあと言つて少女が正面に顔を戻すと、ユウロに後ろから抱き着いている長身の男。次の瞬間、その男の米神に職人が銃口を押し付けていた。

ユウロはきょとんとして職人を見た。しかし職人はユウロの方を見ずに、男を睨みつけた。

「いい御身分だなあ、カズン」

「おーシリ亞。俺かて好きでやつとるんじやないんで? なんじやつけ、ほら。女を見たらまず口説け」

「その行動理念どうにかしやがれ」

なにやらわけがわかつていらないユウロをはさんで、二人の男が口論を始める。長身で赤茶髪の男と、職人の言い争い。すると職人とユウロの間に、少女がにゅつとやつてくる。少女はユウロの顔を両手で包んで、にっこりと笑つた。

「ねえシリ亞、この人、シリ亞のハニー?」

「馬鹿かお前は」

「お?」

職人は少女の首根っこをつかみ、投げ飛ばしてしまつ。いつも簡単に吹つ飛ばされた少女は、頭から砂に突つ込んだ。

ユウロが解放され、職人は男の米神から銃を退けた。

「シリ亞がそがあな風に女の子守るん、初めて見たなあ」

「うるさい。それよりカズン、お前馬車はどうしたんだよ。兄妹水入らずで旅してんのかよ」

「いや。クロルたあさつき会おたばっかりで。ところで、このかわいい子は結局誰なん?」

「いい子は結局誰なん?」

男はユウロの頭を撫でながら言う。少なくとも、彼とユウロの身長は二十以上はあるいるように見える。職人とはあまり違わないように見えた。

職人はユウロをちらりと見てから横目で少女を見やり、はあを息をついた。そして男を見て、口を開く。

「コイツの名前は、ユウロ。つい先日まで姫君をしていた、女だ。国が崩壊したから、俺と旅をしてる」

「へえ、姫君。そりやかわいいわけじゃ」

「ユウロ。コイツはカズン。旅人相手の商人だ。俺の作ったガララス工芸品を高値で売り捌いて来てくれた」

「そうなんですか……あのつ、シリアって誰ですか？」

「なんじゃシリア、お前自己紹介しとらんかったんか。姫君、シリアっつうのはここにある男じやア」

「シリア、なんだ」

ユウロが納得したように頷いて、職人・シリアのほうを見ると、シリアは黙つたまましゃがみこんでいた。どうやら暑さが堪えている様子。今日、口数が多くたのは彼ら（否、彼のみか）が友好的な知人であつたからなのかと納得し、ちらりと少女のほうを見る。するとそれに気付いたのか、男・カズンがユウロの肩を抱いて、少女のほうを指差した。

「そんで、あつこの砂に埋もれどんのが俺の妹で、えーっと、クロル。基本的にやあ孤高の女盗賊じやの。俺と、シリアとクロルの三人は度々一緒に旅しどんじや。利害が一致した仲間つー感じじやのよ」

「え……しょ、じゃないや。シリア、私、邪魔？」

「……別に。いまさらだろ。つていうか、名前も今さらだから、職人でいい」

シリアがぶつきらぼうにそつ返すと、カズンはふむとあごに手をやる。そしてシリアの全身を上から下まで眺めて、ポンと両手を打ち鳴らした。

「シリア、そろそろ熱に疲れたじゃろ。俺の馬車で次の国まで連れてつちやるよ」

「助かる。姫君、行こいフ」

「姫君?」

「……ユウロ。行こいフ」

言い直してから職人はカズンについて歩き出した。その後ろを、少女・クロルが追ってきた。クロルはユウロの横について、にこり笑った。

クロルはユウロの顔をじーっと見てその頬を撫でた、突然のことには、冷や汗が右頬を撫でた。

「かわいいね、あなた。シリアにしては珍しいかも」

「……え?」

「シリアは守つてあげたいタイプ、選ばないから」

クスッと笑つて、クロルはシリアのほうへ走つた。ピタリと足を止めて、動けなくなるユウロ。自分のことについて改めて、愕然となる。ユウロは、武器はあるか護身術すらできないのだ。昔から稽古は必ずといっていいほど抜け出していたし、護身術も真面目に習つたためしがない。

自分は役立たずなのだ。そう自覚し、一步後退りした、瞬間。振り向いたシリアの顔が見る見るうちに青ざめた。

「ユウロ、逃げろっ」

「え……」

『無駄だ』

黒い影がユウロを包む。目を見開いたユウロが助けるように手を伸ばすが……ユウロの姿は、影に飲み込まれた。シリアは影へと斬りかかるが、影はふわりと拡散して人型を模つた影となる。

『久しぶりだな、シリア。姫君は頂戴した』

「お前にその姫さんは関係ないじゃろお？」

剣を構えたカズンが、影に対峙する。影はクックッと笑いながら、

言葉と紡いだ。

『お前たち兄妹がなにをしようとも、小生の主が野望は消せぬ。主はこの『魔柔』と、シリアの『魔力』を手の内に入れ、世界を統べる存在となるのだからな。今はこの娘も返そう。一つを同時に手に入れぬことには、なににしても意味のないことだ。この度は牽制のつもりで参ったのだよ』

嫌な笑いを残して、影は消える。代わりのようだに、コウロの姿が現れた。目を閉じてぐつたりしているコウロにシリアがすぐさま駆け寄る。コウロの上半身を起こしながらその頬を何度も叩き、意識を戻そうと試みる。

「おい、おいっ」

「とりあえず俺の馬車に乗せえ。すぐ近くの国まで送るけえ、シリアも乗れ」

「……ああ

シリアはコウロを抱いて立ち上がり、カズンの馬車までおぼつかない足でゆっくりと歩き始める。その光景を見て……クロルはチッと舌打ちをした。

「なによシリアつたら。あんな女がいいの？」

「諦めえ、クロル。シリアはずつとあの子が好きだったんじゃけん」

「なんですよ。兄貴知ってるの？ あの子、姫様なのよ？ 一刻の姫君が、シリ亞みたいな一介の旅人と結婚したり恋愛したり、許されるわけ無いじゃないつ」

「……あの子に、帰る郷はない。或る国の姫君じゃつたらしいが、先日、崩壊したと聞く」

「崩壊つて……じゃああの子、國が無いわけ？」

「許す・許さんの問題じゃないんじゃけえ、お前がそんなん口出したかでどうにもならん。ましてやシリ亞は、他人の意見聞くよつな奴でもないし、気に入らん奴を終始傍に追いとけるほどお人好しでもない」

「それは、私だってわかってるよ」

カズンに向かつて大きく舌を出し、駆け出すクロル。どうやら旅

を再開するらしい。

「絶対、あんな女の子にシリアは渡さないんだからっ」

一度だけ振り向いてそのセリフを叫び、前を向いてまた走りだす。カズンはやれやれと肩をすくめてから、駆け足で馬車の方へ向かった。

馬車の荷台には、商品の陰に寝かされたユウロと、その傍でユウロを見守るシリアの姿がある。

「……クロルじゃなあけど、珍しいな。シリアがそういうタイプの子とおるの？」

「まあな」

「馬車、出すで？」

「苦労かける」

「お互い様じやろ」

そう言つて手綱を握り、馬を動かす。陸であれば砂漠であろうが進めるこの馬は、通常の馬のスピードで砂漠を通過する。ラクダなら二日。馬なら丸一日あれば最寄の国へ着けるだろ？

翌日の晩過が、馬車はようやく国へ到着した。入国審査を済ませて、馬車は街の中へ入つていぐ。

「じゃあシリア、街出るときは一緒に、宿で待つといわ

「ほんと、苦労かけるな」

「気にするな。姫君、早う病院連れてつたり」

「ありがとう」

礼を言い、シリアはユウロを抱いて病院へ向かつた。

ユウロが病院で診察を受け、宿で眠り始めてからすでに一日が経過した。医師の診断結果としては、至って良好のことだった。眠りについているようにしか見えないという。だが現に一日間ユウロは眠り続け、まだ目を覚まさずにいる。

シリアはカズンと交代でユウロを見ていて、今はシリアが見てい

る。コウロは死んだように静かに眠つてゐたため、カズンは何度か本当に死んでいるのではないかと心配になつたほどだ。

そのとき、コツコツとノック音がして扉が開く。

「おはよ、シリア。姫さんの目は覚めたか？」

「まだだ」

「そろそろ目が覚めないと、栄養が足りないとちやうか……？」  
果然とカズンが呟いた時、ピクリとコウロのまつげが動く。そしてゆつくりと、その瞳が開かれた。

「職人……カズンさん……」

「コウロ、大丈夫か？」

「あの私つ、どうしてここに？」

「倒れてしまおたんよ。丸々三日間ぐらいい眠つとつたんじやあや」

「そんなに……」

「元気になつたなら良かつた。俺は、病院に行つて医師を呼んで……」

「コウロ？」

立ち上がろうとしたシリアの服の裾を掴んだ。泣きそうな瞳でシリアを見て、なんでもないといつよに首を振つて手を離す。そして自分にかけられていたシーツをぎゅっと握つて、外を見ていた。

「……どうかしたのか？」

「なんでもないの。お医者さん、早く呼んで来て」

「カズン、頼んだ」

「了解」

苦笑して、カズンは外へ出て行つた。看病用の椅子にどっかりと座り込んで、コウロの方を向くシリア。コウロは驚いて目を見張り、けれどすぐ逸らしてシーツの一点に焦点を定めていた。

シリアはコウロの頭を撫でながら、息をついた。

「なにか、不安になることでもあつたか？」

ふるふると首を横に振るコウロ。根気強く、シリアはコウロの頭を撫で続けた。

「もしもクロルがなにか言つたなら、気にしなくていい。俺は別に

お前を情けのつもりで引き取ったわけでも、裕福になりたくて引き取ったわけでもない

「……つあたしみたいな、役立たずが一緒に旅してもつ、しょくにつの、足手まといに、なちやう、から……つ」

「役立たずつて……あの馬鹿、そんなこと言つたのか？」

「言つてないけどつ……私本当に武道とか、護身術すらできないし、絶対職人の迷惑に、なっぢやう……つ」

「……」

「シリア、医者」

「ああ」

カズンの声に、シリアは了解の合図をして許可をする。すると扉が開いて医者が一人、カズンに連れられて入ってきた。医師は手早く診察を済ませると、以上なしの結果を出して去つて行つた。

医師の帰つた診察室で、シリアはユウロの方を向く。

「もしお前が、俺と旅するのが嫌ならそれでも別に俺はかまわない。一週間くれてやる。俺はこの街を留守にするから、お前は一人で子の街にいる。一週間後に迎えに来てやるから、それまでに返事を出せ。もし俺と旅するのが不安で嫌になった場合、カズンが俺らの故郷に送り届けてくれる。俺の国に住め」

有無を言わさぬシリアの言葉に、ユウロは恐々と頷いた。

そうしてシリアはカズンと共に一週間街を離れ、ユウロは一人取り残されることとなつた。

一週間後、街付近。

「あへ、一週間以上シリアと行動一緒にするなんて、何年ぶりじやろうな」

\* \* \*

「俺は基本的に単独行動派だからな」

城門に到着して、入国審査を済ませる。そうして中へ入った直後、中心部の方から複数の悲鳴が聞こえた。慌てたようにシリアが馬車を飛び降りる。

「カズンは後で来い」

「ここで、馬車猛スピードで走らせたら怒られそうじゃしな」  
ククッと笑つて言うカズンを見ずに、シリアは広場へ駆ける。

広場には人だかりが出来てあり、ざわざわと騒がしかつた。嫌な気配を感じ取り、手近にいた人になにがあつたのか訊ねる。

「お兄さん、他の人？」

「ああ、先日入国して、所用で出かけていた。今日帰ってきたところだ」

「もしかして『シリア』さんかねえ？」

「俺を知ってるのか？」

「さつき、宿に泊まつてた女の子がねえ、黒い獣に食われつちまつたんだよ。それでその女の子を食つた黒い獣がさ、『シリアに伝えろ』って、伝言を残したのさ」

「伝言？」

「『お前の姫君は預かつた。返して欲しければ小生の城まで来るがいい』って。お兄さん、あの黒い獣と知り合いなのかい？」

「知り合いではない。ただ、心当たりはある。性悪の魔法師だ」

ギリツと奥歯を噛み締めて、宿へ向かう。一週間前、一週間の契約で借りがユウロの宿は、案の定空っぽだった。シリアは荒く呼吸しながら宿の契約を切つて、カズンの方へと急いだ。

「カズン、ユウロが攫われた……っ」

「はあ？」

「アイツにユウロが攫われた。返して欲しければ城まで来いって、

メッセージがあつたんだ」

「じゃ、行くしかんじやろ。どうする、クロル呼ぶ？」

「あいつはいい。ユウロのこと良く思つてなかつたみたいだし」

「けどもういたりするのよね~」

声にシリアが振り向くと、そこには満面の笑みを浮かべたクロルの姿。しっかりと旅支度をしたクロルの姿を見て、コウロは深い深いため息をつく。

カズンはクロルのほうを見て、ふむと顎に手を当てた。

「クロル。今回なあ遊びじゃないんだぞ?」

「だから言ったのよ。あんな『守られなきやいけないタイプ』は、シリアには絶対合わないって」

「それをわれ、アイツに言うたんか?」

「言つてないわよ」

勝ち誇ったように言つクロルに、シリアはげんなりとしてカズンの方を向く。そして三人は馬車へ乗り込み、入国一時間で出国する。コウロの無事を祈るシリアやカズンとは裏腹に、いつそコウロが消えていればいいのだと願うクロル。三人を乗せ、カズンは馬を急がせた。

馬車の中、シリアはコウロを攫つた敵について一人に説明を求められた。

「だつて敵がわかんないんじや闘いようがないし」「ねーっ」

二人の熱意ある視線に負けてか、シリアは肩を落として、馬車を絶対に止めないことを条件に説明を始める。

「コウロを攫つたのは、魔女の使いである、使魔だ。魔女本体は城において、直接手は下さない。その魔女ってのは、俺が昔習つてた師のライバルで、世界を自分のものにしようとたくらんでる奴だ。俺はそいつの呪いを受けてる。そしてアイツは俺を手に入れて、世界を統べる計画に拍車をかけようとしてやがる。俺が、そんなことは許さねえ。俺の師を殺した仇も討つ」「つまり相手は凄腕の魔女ってことね。了解。こんなところでシリアの役に立てる日が来るとは思わなかつたわ

くすくすつと笑いながら、クロルは言う。いかにも戦闘の術を持たないユウロを馬鹿にしたような笑い方だ。戦闘能力を持たない彼女はシリアの役に立てない、と言わんばかりの口調。

魔女の城までは馬車で三日、砂漠を過ぎたところにあるという。

暗闇の中、ユウロは目を覚ました。頭が痛くなり額を押さえ、自分がどうなったのかを思い起こした。

（たしかなんか、前みたいな黒い影に捕まつて……それから、どうしたんだっけ）

「起きたかしら、お姫様」

「あなた、誰？」

「私？ 私はシエラ。初めまして、お姫様」

「職人やカズンさんはどこ？」

「いるわけないでしょ。彼らは、ここへあなたを迎えて来るの。シリアも甘くなつたものねえ、あなたみたいな女一人のために命を捧げるなんて。ここへ来れば私の思惑通りなんて、頭のいいあの子が分からぬわけないのに」

クスクスと嫌な笑みを浮かべながら、言う。月明かりに照らされて浮かび上がる女の姿は妖艶だった。黒く長いストレートの髪に、床につくほどの長く細いノースリーブのドレス。光を宿さない瞳。

女は妖艶に口端を上げて、ユウロの前に水晶玉を一つ置いた。

「これで彼らが城に入つてからの様子は見れるわ。好きなだけ見なさい」

クスクスと嫌な笑いを浮かべ、女は部屋を立ち去る。どれだけ追いかけたい衝動に駆られたか分からない。しかしユウロは鎖によって拘束を受けているため、身動きすらままならない状態だった。

食事は定期的、日に二回運ばれてくる。トイレのときは見張りつきで連れて行つてもらえる。けれど日を見ることは叶わなかつた。

そんな生活が一日続いたある日、水晶に変化があつた。今まで単なるガラス玉のような働きしかしていなかつた水晶が、城を守った。そこには映つているのはユウロとカズンと……

(クロル、ちゃんと……)

その心の声が聞こえたのか、クロルは何かに気付いたように上を見上げた。それは水晶を通して、ユウロを睨みつけ、勝ち誇つたような笑みを浮かべる。

そうしてクロルは、シリ亞の腕へと自分の腕を絡め、水晶の視界から消えた。

\* \* \*

シリ亞一行は、ユウロ救出のため城へと入り込んだ。初っ端から何か仕掛けることはないと踏んでいるため、シリ亞は臆することなく暗闇を歩き続ける。

そんなシリ亞について行きながら、クロルは不満が褐々しく渦巻いていた。

「ねえ兄貴。なんでシリ亞はあんなにあの子を気にかけるの？ 戰闘能力もない单なる役立たずなのに」

「さあな。そりやあシリ亞にしかわからんことじやけん」

「おいお前ら。無駄口たたいてもいいが、第一の扉だぞ」「オッケー」

この城には四つの閑門がある。四つ目の閑門をクリアすれば、最上階へ辿りつけるシステムだ。すなわち閑門へ踏み込まない限り、敵に攻撃される心配は皆無である。

大きな軋みの音を立てて、巨大な樹の扉が開かれる。扉が開いた瞬間、壁に設置されているろうそくに火がついた。天井の電気で明るく照らされたその部屋にいた、最初の敵。

『初めまして。ワタクシ、シェラ様の第四部下であります』

「……第一手は俺が行こつかのぉ。いきなり主役登場じゃつまらんじやろーで」

「……」

『原則勝負は一対一。仲間の手出しがルール違反とさせていだきます』

「エエよ、俺とやろーや」

カズンが身軽に闘技場へ入った。観客席のよつた一人のいた床が高見へと上がり、闘技場を見下ろすよつた形となる。

「さあ行くぜ」

剣を構えたカズンは、先手必勝といわんばかりにダッシュする。大きな剣を横薙ぎに振りきり、敵を一発で半分にしてしまう。

「なんじや、呆氣ないな」

『注意力散漫なのですよ』

低く声が呟いたかと思うと、カズンの肩を長い爪のようなものが貫通した。抜けると同時に、射された部位から夥しい量の血が流れ出す。

『笑わせないで下さい。まだワタクシは、第四部下なのですよ』

「うつさいわあつ！」

大声と同時に、銃弾を放つ。最後の銃弾を撃つと同時に、カズンは剣を振りかざし、敵目掛けて渾身の力を込めて振り下ろした。敵は半分に切れ、白く拡散する。

『敵いません、シェラ様……すみません、ワタクシは先に逝かせていただきます』

そう呟いて、白い粒子は弾けて消えた。同時に高見台も消え、突然のことによく着地できなかつたクロルは尻餅をつく。しかしシリアは空中で段を踏み、カズンの方へ駆けつけた。

「大丈夫か？」

「肩以外は怪我しどらん。心配すんな」

「……」

シリアは闘技場を見つめて、行こうう、と呟く。その言葉にカズンは立ち上がり、二人は出口に向かつて歩き始めた。その後を必死になつて、クロルが追う。

扉の向こうは階段になつていた。何階かわからないほど昇つた。無論、普通に昇つたのではない。彼らの跳躍力と脚力を駆使した、忍者が屋根を伝うような感じで昇つたのである。

一番目の扉は鉄である。またしても大きな軋みの音を立てて、扉が開く。入つてすぐは最初から高見になつていて、闘技場は水上に浮いていた。闘技場の上には女が一人。

『お初御目にかかります。うちはシエラ様の第三部下です。お手柔らかに』

にこつと笑う女。シリアがカズンの方を向くよりも先に、クロルが闘技場へ入つてしまつた。高見から闘技場までの道は『跳ぶ』しかない。

「私が相手よ、女！」

『よろしう頼みます』

柔らかく笑む女。ドキッとその笑みに身体を止めた瞬間、クロルの背後に女の影。

『遅すぎます』

『がはつ』

殴りつけられて、闘技場が揺れる。女を蹴り飛ばして立ち上がり正面を向こうとするが、闘技場が揺れるためどうにもバランスがとれにくい。

右手に腰に備えてある三本のスローイングナイフを持ち、左手に大きなハンターナイフを持つ。瞳を閉じて女の気配を探りながら、クロルはナイフを持つ手に力を込める。

『遅い』

「そこ」

気配を察知した場所へ、スローアイニングナイフを三本連続で打ち込む。女は咄嗟に水へ潜つたが、その水も赤く濁っていた。

ハンターナイフを両手持ちに切り替え、女が来るのを待つ。しばらくして女は、血に染まつた右腕を掴んで闘技場へ上がってきた。

『やるじゃない、女のクセに』

「闘うのに、男も女も関係ないもの。強いか、弱いかだけよ」

そう言つて女へ向かつて突進する。すると女はしゃがみこみ、バンバンと床を叩き始めた。これが普通の床ならいざ知らず、水上に浮かべられただけの床である。走るだけでも揺れて走りにくいのが、さらに追い討ちをかけるように揺れる床にクロルはバランスを崩す。

見越していたかのように、女はクロルへと飛びかかった。女がクロルへナイフを突き立てる直前、闘技場が真つ二つに割れて水飛沫が上がつた。これではどちらがかつたのか分からぬ。

「……クロル」

祈るようにしているカズン。ザバッと音がして、自ら誰かが出てくる。扉のある陸地に立つて、こちらを向いた。

「クロルッ！」

カズンの叫びに、クロルはニッコリ笑つて大きく手を左右に振つた。二人は高見から飛び降り、空中で段を踏んで向こう側へ渡つた。到着早々、カズンがクロルを抱き締める。

「死んだかと思うたぞ、馬鹿野郎」

「死なないよ。当たり前でしょ？」

そう言つてクロルはニッコリ笑つて天井の方を見据え、勝気に微笑んだ。

\* \* \*

第一・第二と勝ち進んだ一行は、第三の門を通過し、第四の関門へ向かっていた。第三の門はほぼ無傷のクロルが戦闘していたが、どうやらそこで相当の深手を負つたらしく、その後は腕をずっと掴んでいる。

水晶で一部始終を見ながら、コウロは奥歯をギリリと噛み締めるより他なかつた。腕力も握力も無い自分は、こうして捕まえられていても自力で脱出ができない。かといって戦闘能力もないので、あの鬪いの場にいたところで足手まといになるだけだ。

『一週間後に迎えに来てやるから、それまでに返事を出せ』

あの言葉は本気だつた。これからもシリアと旅を続けるか、足手まといになるから辞めるのか。辞めて、一人で生活するのか。無論一人は嫌だが、自分勝手な理由で足手まといになると分かっているのに旅に同行するのは勝手極まりないのではないか。

「……」

「お姫様、気分はいかがかしら」

牢の中にシエラがやって来る。彼女が来ると牢の中の闇が一層その色を濃くしたように見えるので、コウロは彼女がどうせ苦手だった。

「シエラさん……」

「困ったことに、騎士たちは第三関門を突破してしまってようなのがねえ……まあ第四関門にいるのは私の一番の部下だし、負けるという心配は不要だと思うんだけど。彼らが勝つても負けても、シエラには会えるから心配しなくとも大丈夫よ」

口元に笑みを浮かべてスピカは言つ。彼女の言葉には、シリアがここへ来るから会える言つよりも、シエラを捕獲するから会えるといった風に聞こえる。彼女の思惑が全く見えない。

「イイコト？ 小娘。あなたはね、生かされているのよ。あなたの中の、魔獣によって生かされているの。まったく、あなたが魔獣の住処になつていなかつたらすぐさま殺していたところよ。まあ魔獣

を連れてなかつたら狙うこともしなかつたけれど

それだけ言つて嫌な笑みをこぼし、スピカは牢を去つていく。そんなスピカの背中を睨みつけ、水晶へ目を移す。三人はすでに第四関門の前へ立っていた。シリアが一人の方を見て確認し、扉を開く。そのとき、クロルがこちらを向いて……笑う。四度目だ。城に入る前、第一・第二・第三関門の後もこうしてこちらを向いて、勝ち誇つたようになつてくる。

『あなたは闘えないけど、私はこうして闘えて、こうしてシリアの役に立てるのに、あなたは闘えないから役立たずなの』

そう言うように、彼女はこちらを向いて笑うのだ。ユウロに向かって『役立たず』と言わんばかりの笑みで。

「わかつてゐるわよ……自分が役立たずってことくらいは」

不自由な両手拳を握り締めて、ユウロは奥歯を噛み締めた。

\* \* \*

第四関門に入る。そこは六だらけの洞窟のよつた闘技場だった。おそらく、ここはもう数十階となつていることだろう。さすがに三桁には及ばないとと思うがかなりの高さだ。

「……俺が闘う」

そう言って、シンリが闘技場に降り立つ。すると穴の一つから、影が現れた。影は地を這うようにしてシリアの前方に止まり、人型を模る。

『この形ではお初御目にかかる』

そう言って影は、本物の人間になる。男だと信じて疑わなかつたが、そこにいたのは真っ白な女だった。真っ黒な髪に真っ白な肌。左頭部に面があるところを見ると、普段はそれをつけているのだろうか。真っ黒なボディースーツは、見るからに影と混じらせた。

「お前その声、一回俺の前に姿を現した奴だな」

『いかにも。小生はスピカ様の第一部下にして、戦闘部隊の隊長である』

「……女が、ね。勝負しようぜ。わざと行かないと、ユウロが泣くんだ。森でもいつも泣いてたしな」

『先手はくれてやる』

「つ……そつかよつ」

言い放ち、刀を居合い抜きして女へと斬りかかる。しかし女はするりと素手で流して、影に溶け込む。

『そう易々と、お前に捕まつたりはせぬよ』

声と同時に、影が穴へと消えていく。シリアは先ほどクロルがしていたように目を閉じて、気配を追つた。だがクロルと違い、シリアは影がすぐ近くまで近付いても微動だにしなかった。

「シリアアツ！」

クロルが叫ぶのと、シリアが動くのは同時だった。刀を床に突き立てたかと思うと、影はするりと移動した。

しかし影はしつかりと、シリアの足に傷を残している。シリアの足の下には赤い水溜りが出来上がつていった。だがシリアはその傷を気にしないかのように一度その足を踏み込み、刀を下ろして脇に構えてそのまま再び固まつてしまつ。

シリアには何か考えあつてのことだろうと黙つているカズンとは裏腹に、心配で仕方ないのかしきりにシリアの名前を呟くクロル。先ほど同様動かないシリアへと忍び寄る影。その影には、光るもののが見える。

そのとき影は、ふと氣配を消した。

「！」

「兄貴、影がマジで消えちゃつたよつ

さすがのことに焦るカズンだが、シリアを信じることに決めたのかクロルの言つたことに答えもせず、黙つてシリアの方を見据えていた。シリアももちろん気配が消えたことに動じただろうが、その

様は欠片たりとも見られない。

『これで終わりだ』

低い声が呟くのと、シリアの両肩を一本のナイフが貫くのは同時だった。シリアは一度傷みに眉を顰めたが、しかしそのナイフを掴む腕を捕まえ、女に退治した。

「捕まえたぜ、お前の尻尾……つ」

そう言つて女の片腕を右手で掴んだまま、左手で刀を握り、なぎ払つた。女は半分に切れ、下半身が闘技場に転がつた。

『勝てた、思つたが……』

「お前は強い。ただ、俺の方が強かつた」

それだけ言つと、シリアは女が息を引き取つたのを見届けてから、動かない両腕を無理やり動かすようにして、カタカタと震えながら刀を鞘に収めた。そのままだらりと腕を下げたまま、次の扉を体当たりで開く。

「……あの馬鹿っ」

カズンが高見台を飛び降り、シリアの元へ駆け寄る。着ていた上着を脱いで両肩を包むようにきつくなじんでやつた。

「一応、応急処置。行くぜ、姫君助けるんだろ?」

「……ああ」

怪我をしているにもかかわらず、シリアは深く頷いて駆け出した。片足に加え両肩への刺し傷。痛くないわけがない。だがシリアは痛みを感じないかのような俊敏な動きで、怪我の度合いが低いカズンよりも速く階段を駆け上がつた。

「敵わんよ、馬鹿」

苦笑しながらそう言つて、カズンはその場にへたり込んだ。

\* \* \*

シリアが、勝つた。これでユウロは解放され、またシリアと旅が出来るのだが……ユウロの顔は、いまいち浮かばれなかつた。

「どうしたの。シリアが勝つたのだから、私の賭けは一時中断よ。また次の機会を狙うわ」

言いながらシエラがユウロの拘束を解いた。ユウロは開放された腕を撫でながら、うつむいている。その両手両足首は赤くなつていた。

「……職人、大怪我してたね」

「そりやあ戦闘だもの。闘いの中に身を置く者として、あの程度は予想の範疇だわ」

「でも私を助けになんて来なかつたら、怪我なんてしなかつた。私がいなかつたら、職人は怪我なんてしなかつたし、ここに来る必要もなかつた……っ」

「馬鹿だろ、お前」

ユウロを抱きしめる、あつたかい腕。ユウロは流れていた涙を止めることもせず、硬直してしまつた。

力の入らない両腕で、ユウロを抱きしめるシリア。

「ただいま、ユウロ。一人にさせて悪かつた」

「職人……」「めんなさい、ごめんなさい」

「なんで謝るんだよ。俺、別に後悔もなんもしてないし、ユウロが謝るようなことなんにもない。それよりお前、旅はどうするんだ？」

俺の怪我がどうとか、戦闘能力がどうとか言い訳するな。お前が、どうしたいか聞きたいんだ

「私、が……」

ユウロは呟いて、うつむく。いつの間にかスピカの姿もなくなつている。本当に今回は諦めてくれたらしく、殺氣も全く感じなくなつていて。シリアはユウロを抱きしめる腕にさらに力をこめる。

「私は……もっと、職人と、カズンさんと、もっともっと、旅がしたい……っ」

そう言つて振り返り、シリアにしがみついて泣き出す。シリアは

呆れたようにため息をついて胡坐をかき、その膝の上に乗せて、ポツポツとコトバを紡ぐ。コウロは泣いていたことも忘れ、そのコトバに聞き入った。幼い日に聞いた、詩詠みの詩人のようだった。コウタを思い出さずにはいられない詩とリズム。耳に馴染む声。

「おい、コウロ」

いつの間にかその心地よい音色に、コウロは眠りについてしまった。肩の怪我が痛むシリアもコウロを置いては動けず、カズンを待つた。

カズンが来てコウロを担いでもらい、カズンが壁を蹴り壊す。おそらく三桁になるであろう階数を、二人は恐れることなく飛び降りた。砂漠の果てへ着陸を目指して、三人の旅は始まったのである。

それももう、数年前の話となる。

ユウロが二十歳を過ぎてしばらくが経つた。相変わらず三人で旅を続けている、シリア・ユウロ・カズンの三人。シリアはちつとも歳をとっていない様子だが、カズンは少しづつ三十路に近付いているといった感じを漂わせていた。

「姫さん、メシー」

「出来るよ。職人はまだ？」

「え？ 僕が起きたときやあもうおらんかったけど

「おかしいなあ。いないんだけど」

ユウロは鍋の中身をかき混ぜながら、辺りを見回した。彼らは旅人、基本はカズンの持つている馬車で旅をしている。

ユウロは呆れながら、餌を持つて馬のところへ向かった。

「おはよう。ごはんだよ」

餌を地面に置きながら、ユウロは言った。馬がユウロのほうを向き、地面に置かれた餌を見る。そして餌へと口を伸ばし、食べ始める。

ユウロはそれを見てから、再び鍋のある馬車の方へ向かった。すでにシリアは戻ってきていて、カズンの横に座つて一人で話している。

「職人、おはよ。どこ行つてたの？」

「おはよう。別にどこも」

「ふーん」

シリアが誰にも言わずどこかへ行くことは稀ではないので大して突つ込まず、ユウロは朝食の準備を始める。カズンとシリアの会話内容は聞こえないが、何か話しているらしい。

魔女に拉致されて数年、ユウロは日に見えて強くなつた。だがそれは以前のユウロに比べれば話であつて、三人の中では一番劣る。カズンやシリアの足元にも及ばないだろう。

考え方をしていると、視界が真っ暗になる。

「な、なにつ」

驚いて振り返ると、そこには呆れたような表情をしているカズンの姿があつた。その大きな手で、カズンはユウロの頭を撫でる。「なんか考え方か？ 姫さん、悩み癖でもできたん？」

「ううん、なんでもないよ。さ、ごはんにしよう」

簡易食器にスープを注ぎ、一人に渡す。そうしてパンを切り、それも一人の食器の上に置いた。ユウロの食器が見当たらないが。

「ユウロ、メシは？」

「え？ 私、もう食べたよ？」

「嘘付け。食つてないだろ、見てたんだからな」

朝食を進めながら、シリアが言う。ユウロは息をのんで、諦めたように息をついた。自分の食器にスープを入れて、それを口にする。「だいたいな、自分が食わないもんを他人に作つてんじゃねーよ」「……ごめんなさい」

手早く食事を終えて、ユウロは食器を洗いに川へ向かつた。鍋のスープをおかわりしながら、カズンはシリアを睨みつける。だが何かを言うわけでもなく、スープを山盛りについて自分の席に座つた。しばらくして、ユウロが帰つてくる。そして空になつている一人分の食事と鍋を持って、再び川の方へ向かつた。

川の水に食器を浸して洗う。炊事選択はユウロの仕事となつていた。戦力としては役不足なユウロはコレくらいしか一人の役に立たない。

「……いまさら、だよね」

皿を水につけたまま、コウロは手を止める。いまさらだが、ついてこなければよかつたと思うのだ。魔女に拉致されてから数年、あの頃に比べて戦闘能力は上がったとはいえ、同時にカズンやシリアの戦闘能力も上がっている。結局足元にも及ばない。それどころか、一緒に旅をすれば足手まといにすらなりかねない。

魔女に狙われることは、この数年はなかつた。獣や盗賊におそわれたくらいだ。だがそれでさえ、無傷の勝利は得られない。

「……」

「お前、何か考え方してるだろ?」

シリアの声に驚いて皿から手を離す。流れそうになつた皿を、シリアが受け止めて地面に上げた。

自分の考えていたことがばれたような気がして、コウロは水面を見つめうつむく。

「隠し事してもわかるんだよ、お前は。昔から」

「昔の私を知ってる人は、もういないもの。両親も、国のみんなも、みんな死んでしまつた」

「俺はお前の過去一点を知つてゐる。カズンだつているんだ。いまさら『同行しなきゃよかつた』なんてくだらない」とは考へない方がいいぞ」

「なんで、そのこと……？」

「言つてんだる。お前が隠し事しても、俺にはすぐわかるんだよ」  
くしゃくしゃっと頭を撫でられて、コウロはほつと息をついた。  
シリアはコウロを見ているし、カズンもコウロを見ている。自分が一人であつたなどと思つるのは失礼にあたる。

「ごめんなさい、職人」

「わかつたんならいいよ。ちゃんとメシ食えよ、次こそは。襲われたときに体力がありませんじゃあ話にならないからな」「うん、わかつた」

コウロは深く頷いて、皿洗いを再開した。

「姫さん、大丈夫そうじやつた？」

「また阿呆なことでも考えてたんだる。もう大丈夫だよ、多分」「多分かい。まあエエか。どの道、姫さんには行く場所も無いし、ここだけが家じやろ」

「ユウロが一人になつたら、何されるかわからないからな。あれから数年……そろそろ、警戒が必要だろ」

シリ亞はそう言つて、ユウロのいる川の方を見た。ユウロの背中だけは見える位置だ。まだ皿洗いが終わらないらしく、せつせと手を動かして皿を洗つている。

よいしょ、と声を出しながらカズンが立ち上がり、伸びをした。

「ちよいと、姫さん手伝つて来ようかね」

「警戒しろよ。あと、アイツが落ち込んでるみたいだつたら、多分原因は自分が足手まいになるんじやないかつてあたりだろつか。つたく、何年も前にクロルが言つたことまだ気にしてんだよ、アイツ」

「シリ亞、姫さんと会つてから喉の調子良さうよな

「……そうか？」

不思議そうに首をかしげるシリ亞に笑つて返し、カズンはユウロのほうへ駆けて行つた。

カズンの言葉を反芻しながら、シリ亞はここ数年の事を考へていた。たしかにユウロの国が崩壊して一緒に旅をするようになつてから、その道すがらよく話すよつになつっていたかもしけない。やはりユウロは偉大である。

「あーあ……詩でも詠まなきや、いけないのかね」

「シリ亞、終わつたでー」

「お、遅くなつて」めんなさい

「いいよ、別に。た、食器片付けて次の国行こうぜ。砂漠国家は偉

大だよな、次も?」

「次は……ま、しがない国じやろ」

「……へえ」

地図を閉じながらカズンは答えて、馬車の手綱を掴んだ。声のトーンを下げるシリアはそれに返し、馬車の荷台へ乗り込む。そしてユウロを引き上げ、三人を乗せた馬車は動き始めた。

二人の不思議な会話についていけず、ユウロはきょとんと首をかしげる。

「職人、どうかしたの？」

「別になんでもない。そうだ、お前これから周り警戒するようにしろよ。俺がカズンのどつちかと絶対一緒に行動しろ。わかつたな？」

「……ねえ職人、やっぱり私足手まと」

「んな下らないこと考える暇あつたら魔術の練習でもしてろ。お前からは魔力の波動感じるんだ、隠してもバレバレだぞ」

「え？」

再び、首を傾げるユウロ。魔法とは何のことだろう。今まで使ったこともなければ、見たこともない。もちろん神話や御伽噺などで活躍しているので知らないわけではないが。この世にそんなファンタジーなものが存在するとは思っているわけもないのだ。

首を傾げるユウロに驚いて、シリアはユウロの額に手の平を当てた。魔力のコアは脳に組み込まれているため、これが手っ取り早い魔力の軽量方法なのである。魔法師としての資格を持つているシリアはそれができるのだ。

「……お前の魔力値、高いんだけどな。魔法使えないのか？」

「それ使えたら、足手まといじゃなくなるかな」

「別に今のままで全然足手まといじゃないんだが……まあ魔法なんて全人類共通の能力じゃないから、使える奴の方がすごいのは確かだ。そこにいる赤毛の馬鹿も使えない」

「馬鹿とはなんじゃあつ」

手綱を引きながら反論してくるカズンに、ユウロがクスクスと笑い出す。それに安心してか、シリアはユウロの頭をゆっくりと撫でてやる。

「俺もカズンもお前のこと足手まといなんて思つてないから、もう自分が足手まといだなんて思うなよ。クロルが何言つたか知らないが、アイツは孤高の女盗賊だ、強くて当たり前なんだよ。お前は確かに旅には向かないけど、でも頑張つてる。強くなろうともしてる。そういう奴を足手まといだとは思わない」

「……ありがとう、職人」

「それに俺は姫さんのメシ、好きじゃしね。もう姫さんの手料理なじじやあ生きていけんわあ」

笑いながらカズンは言う。じゃあお前いつか死ぬな、というシリアの反論にも負けじと返すカズンに、ユウロは再び笑い出す。自分の居場所を見つけた安心感から、大きく大きく笑つた。

次の国までは二日だと聞いていたが、一行が国に到着したのは出発から四日後だった。

「珍しいね、狂っちゃうの」

「まあこんなこともある。さつさと宿どるぞ」

「あーシリア、俺はちょっと、行つてくれる」

「……わかった。じやあな」

馬車を預けて駆けて行くカズンの背を見送つて、シリアはスタスターと歩き出した。

「わ、職人つ、速いよッ」

「悪い、考えてなかつた。一人になるなつて言つときながら、勝手だつたな」

「大丈夫？ 職人、顔色悪いよ。早く宿に行こう」

「……ああ」

ユウロに手を引かれ、シリアは手近な宿へ入つた。宿の従業員は二人を訝しげに眺めながら、四人部屋の鍵を二人に手渡した。

部屋に入つてすぐ、シリアはベッドへと横になる。この二人と旅を始めて、ユウロは部屋を分けて欲しいと頼んだことは一度もなかつた。国に入れば三人一部屋の宿、旅に出れば三人で外で寝るか馬車の中で寝るか。どちらにしろ一緒である。

「職人、寝ちゃつたの？」

話しかけるが、返事はない。どうやら相当疲れていた様子。外に出ようと思っていたユウロはがっくりと肩を落とし、バルコニーに出て街を見下ろした。賑やかな街の向こうに、城が見える。ユウロの国とは違う正真正銘の城である。

「……いいなあ、国があつて。そうだ、ちょっと出掛け来よう。職人まだ起きないし」

こそそそと扉を開けて、ユウロは外へ出て行く。  
何か祭りでもあるのか、街はとても賑わっていた。いたるところに旗が掲げられているが、異国語のため読むことが出来ない。ユウロは聞いたり話したりという能力には長けているのだが、読み書きがとても苦手なのである。未だに自国の文字以外の読み書きが出来ない。ただし世界百余国、半数以上の言語を理解し、話すことは出来るのだ。

ユウロは人通りの多い商店街を歩きながら、道行く人々を眺めていた。

「国民だあ……いいなあ、本当」

泣きそうになり、路地裏に逃げ込む。まさかあんな大勢の前でいきなり泣くことなど出来なかつた。かといって路地裏とはいえこんな街中で泣けるほどユウロは強くもない。

「……」

「もしかして、ユウロ姫でありますか？」

「え……？」

顔を上げると、そこには茶色の髪をした青年が腰をかがめてユウロを見ていた。いくら髪を切り風貌が変わったとはいえ、ユウロのことが分かる人は分かるらしい。ユウロは瞳に溜まった涙を拭い、立ち上がつた。それに合わせて青年も立ち上がり……グッと、ユウロの唇に布を当てた。

「！」

「失礼します」

青年は口元に笑みを浮かべて、倒れ込むユウロの体を抱き支える。ユウロはふらつく足を必死で立たせながら、途切れそうになる意識をつなぎとめていた。

(職人、職人……っ)

「こちら、商店街路地裏。ユウロ姫の捕獲に成功しました。今から運びます」

どこにだらう。その思考を最後に、ユウロは意識を飛ばした。

花火の音に、シリアは目を覚ました。部屋の中が真っ暗なことに気付き、のんびりと身を起こす。うつ伏せで寝ていたせいか、躰が痛い。

「ユウロ、カズンは戻ってきたか……？」

窓の外をみながら、そう問い合わせる。だが返事は返って来ない。寝ているのかと思い残り二つのベッドを見るが、誰一人としていない。カズンも、ユウロも。

「……！」

ようやく事の重大さに気付き、シリアは刀片手にバルコニーから部屋を飛び出した。屋根伝いに城へ向かう。その道すがら、城の使人を見た。

「おいお前ッ」

即座に抜刀、首筋に刃を当てながら、青年に問い合わせる。

「お前、銀髪の女を知らないか？」

「銀髪の……？　はて。ご存知ないですな」

「知っているだらう、お前なら。ユウロ姫だ」

「存じ上げております。ですがあの国は崩壊したと聞いていますし、姫君も亡くなられたのでは」

「…………もういい」

シリアは刀を納めて、再び屋根へ上がり、城へ向かつた。

表向きの十階、一番左。そこはカズンの部屋である。彼はこの国の王の子供なのでこの城に自室がある。その場所を知っているシリアは、カズンの部屋のベランダに着地して、その扉をノックした。カーテンが開き、カズンが姿を現す。商人とは違い、正装をしているカズン。

「……大丈夫か？」

「俺は平気じや。……けど、俺、もう旅が出来んかも知れん。親父とお袋が、なんや勝手にまた結婚相手決めたんじや。くそつ、なんで俺が結婚せんじやいけんのじやッ」

「結婚相手は？」

「相手は知らん。この後、会いに行く予定じやけど……シリア、姫さんはどしたん？ 一緒におらんのん？」

「ユウロもいないんだ。アイツ、俺が寝てる間にどつか行つちまつたらしい。……多分、ここに連れ込まれたんだ」

「じゃあもしかして、俺の結婚相手って」

「可能性はある。だけどユウロの国はすでに滅びてるから、結婚したところでなんのメリットも……」

そこまで言つたとき、部屋の扉がノックされた。カズンが氣だるそうに返事をすると、凜とした声が返つて来る。

「そろそろお時間です」

「わかった」

そう言つて、再びシリアのほうを向く。

「これから会いに行つてくる。お前、小さくなれるか？」

「……仕方ないな」

「決まりじやな」

シリアは一言二言の呪文を呴き、自分に魔法をかける。するとシリアの躰が見る見るうちに縮まり、姿を消した。どうやら小さくなつただけらしく、カズンが小さくなつたシリアを摘み上げた。

「ええか、大人しく見とけ」

「わかつてゐる」

カズンはシリアを胸ポケットに入れて、部屋を出た。

地下の、冷たい場所へ通される。親に“真っ直ぐ進め”と言われて下りた階段は、ずいぶん下までつながっていた。ようやく到着したかと思うと、今度は長い廊下を進まなければならなかつた。老化が終了したかと思うと、今度はエレベーターに乗らなければならなかつた。しかも数階ではなく、明らかに数十階は地上へ上がつた。ここまで道のり、カズンは親との受け答え以外一つも口を開かなかつた。

エレベーターが停止し、その正面にいたのは結婚相手とはかけ離れた姿の人物である。旅人の装束を身に纏つたまま、鎖で両手両足を拘束されているコウロの姿だつた。いくつかの傷も見受けられるし、捨てられるようにして石詰めの床に転がされ、そのままは閉じている。慌てて駆け寄ろうとして、何かにぶつかつて跳ね飛ばされた。

「つてえ……」

「クリアシールド……」

「姫さんっ」

負けじと、見えない壁を叩いてコウロを呼ぶカズン。すると壁の向こう側に、すなわちコウロの傍に、王と王妃が現れた。カズンの父君と母君である。

「ウイズ。そろそろ遊びも終わつて、城へ戻つて来い。お前は兄と違ひ、この城を継ぐんだ」

「……親父とお袋は、まだキャズを馬鹿にするのか」

「あんなモノ、息子でもなんでもないからな。穢れた血の持ち主など要らぬ」

「……」

胸ポケットから出て、地面へ着地するシリア。そうして小さく呪文を唱えて、元の姿に戻つた。

「このシールドを十五秒だけ無効化する。アイツらも俺が止めるか

ら、お前はコウロ連れて逃げろ

「お前、自分の命賭ける気か？」

「馬鹿。俺がそう簡単に捕まるかよ。いいか、十五秒だ。それ以上

は無理だと思え

「わかった」

「……」

小さく呪文を唱えて、コウロは行けと呴いた。今度はすんなりコウロに駆け寄るが……鎖が、取れない。

「シリア、鎖が！」

「つ……」

冷や汗を垂らしながら、人差し指を王夫妻に向けて呪文を呴き続けるシリア。カズンも負けじとナイフで鎖を切ろうとするが、ナイフ如きで鎖は切れない。

「シリアッ」

「つああああっ」

シリアの叫びと同時にその部屋が爆破し、爆風でコウロとカズンは吹き飛ぶ。しかしその後を、シリアが落ちてくることはなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3848c/>

---

或る姫君に捧ぐ詩

2010年12月2日08時28分発行